

ケアと「自然のスピリチュアリティ」 ——鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク

千葉大学法経学部教授
広井 良典

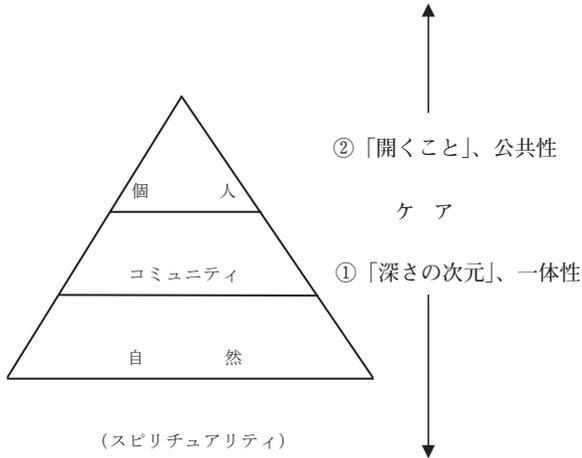
私のお話は三つに分かれておりまして、最初は「ケア」についての概念的な話をごく簡単にいたします。二番目に、私どもの研究グループがここ数年やったケーススタディとして、最近の日本の各地での動きを紹介いたします。三番目に、まとめという流れで進めていきたいと思えます。

ケアとスピリチュアリティ

ケアという言葉は、最近よく使われますが、大きく次のような流れがありました。最初は医療モデルというのが非常に強くて、これは要するに医学的な観点で病気の原因を取り出してそれを除去しては治すというものです。続いて、高齢者のケアなどの場合に、個人の生活の全体に目を向けた「生活モデル」ということが言われるようになりました。しかし、生活モデルだけでは、さらに不十分だということで、コミュニティとか、自然、さらにはスピリチュアリティといったものを含めた、包括的なケア観ということが今重要でないかと私たちの研究グループは考えました。このような問題意識からここ数年間、調査研究を行ったりしてきたわけです。

具体的には、最初『『老人と子供』統合ケア』というテーマについてやって、それから「自然との関わりを通じたケア」というテーマで調査を行いました。これは、ケアの中に自然との関わりをどう取り入れていくかというような、園芸療法とか、森林療法とかいろいろありますが、そういった話です。その延長

図1 ケアの二つのベクトル



(参考文献) 広井良典『ケアのゆくえ 科学のゆくえ』岩波書店、2005年

今回はスピリチュアリティということに注目して進めていったわけです。

ケアというものを考えていく場合に図1のような枠組を考えてみたいと思います。これは単純なものですが、「個人」の底に「コミュニティ」があって、さらにその底に「自然」があり、そのベースに「スピリチュアリティ」というものが存在すると、そのように考えてみたい。言い換ええますと、ケアというのはいろいろな意味があると思いますが、一番重要な意味は、この「スピリチュアリティ」「自然」「コミュニティ」から、特に現代では切り離されてしまいがちな個人を、もう一度「コミュニティ」「自然」、さらには「スピリチュアリティ」のほうにいわばつないでいくこと、これがケアということの、一番もしかしたら重要な意味ではないか。こういう問題意識が出発点にあります。

自然のスピリチュアリティ

もう一つ大事にしたいのが、「自然のスピリチュアリティ」という視点です。やや仰々しく聞こえるかもしれませんが、それほど難しいことを言っているわ

けではなくて、キリスト教や仏教などのいわば高次宗教では、スピリチュアリティというのはいわば理念化・抽象化された概念として考えられる傾向が強いわけです。「永遠の生命」であるとか「涅槃」「空」とかですね。しかし、日本や、日本以外のそれぞれの地域や文化圏における最も伝統的な自然観においては、スピリチュアリティは自然と一体のものとして考えられてきた。いわゆる八百万の神様、風の神様、山の神様、水の神様といった、そのような、スピリチュアリティと自然が一体となっているようなもののことです。そのような視点をケアの中に融合していくことはできないものだろうか。

それを別の言い方をすると、ケアに関する領域が大きく三つくらいあります。まず医療・福祉関係。私たちの研究グループは医療・福祉関係の実践家や研究者が中心でした。第二に環境・自然。こういった関係の方も入っていました。第三にスピリチュアリティ・宗教ですね。こういった本来は非常に深く結びついているはずなのに、縦割りになっている領域を、もう少しつないでいけないかというのが、別の角度からいえば問題意識になっております。

それで、具体的には何をやったかといいますと、社会資源としての環境・自然、それからここで鎮守の森、お寺の話が出てくるのですが、神社・お寺というものに注目しました。これらは非常に貴重な社会資源であるわけですが、いわば高度成長期には忘れられた存在で、日本人の主たる意識の中心から外れていったものだったと思います。しかしそれらを活用した、あるいは舞台としたいろいろなことが本当はもう少し可能ではないかということで、先駆的な実践例をいろいろ探してみたということです。

ケーススタディ (1) プレイセンター・ピカソ

ここから私のお話の二番目の柱に入ります。以上のような流れから、四つ面白いと思われる例を拾い出してみたのです。それは「プレイセンター・ピカソ」「NPO ちんじゅの森」「見沼田んぼ福祉農園」「法然院」という事例です。

まず「プレイセンター・ピカソ」は、東京の国分寺にあるのですが、一言で

言えば神社を活用した、地域保育の試みです。このプレイセンターという言葉は初めて聞かれる方が多いと思いますけど、もともとはニュージーランドが起源だそうで、いわゆる公立の保育所ではなくて、地域の住民が集まって親たちが保育所を運営するという、そういうコミュニティという要素と、それからプレイセンターという言葉にも表れていますように、遊びを非常に重視した保育というような試みです。これを日本でもやってみようということで、「日本プレイセンター協会」というのができました。この代表をやっている池本美香さんは、私どもの研究グループにも入っていただいております。日本での最初のプレイセンターとして、この「プレイセンター・ピカソ」が、神社を使ってできたということになります。

神社というのは鎮守の森であって、建物は、みすぼらしいといったら怒られますけれども、あまり立派では必ずしもなかったりするのですが、必ずこんもりとした森があります。そこで活用されていなかった集会場がプレイセンターによってメンテナンスされ再生されました。要するに、母親と子供がいて、それに必ずしも多くはないですが、地域のおじさんが関わって、世代間交流という要素もあったり、それから畑作業に近くに行ったり、集会所の大掃除とか、いろいろな要素が含まれている。そのような活動の例であります。神社にしたというのは、これはやや偶然のなせるわざで、たまたま地域でいい場所がないか探していたらここが空いていたので使うようになったといいます。事実上、空き家といいますか、放置されていたような場所を使うことになったということです。

ケーススタディ（2）NPO ちんじゅの森

二番目は「NPO ちんじゅの森」という、東京に本部というか小さな事務所があるところですけど、これを自然のスピリチュアリティを引き出してケアに活用する模索というような例として挙げてみたいと思います。ここはいくつか活動の柱があるのですが、ひとつは地域に伝わるさまざまな民話を聞き取りし

て、それを現代風に創作民話にして、地域で神社とか地域の学校とか保育所のようなところで上演する。「チーム励風」というのが、この「NPO ちんじゅの森」の活動の一環としてやっているものです。

それからここはコンサートをやったりしているのですけれども、そういうイベント的なものと同時に、これは最近緒についた、まだ模索中のものですが、ホスピスに関する試みがあります。在宅のホスピスのターミナルケアの話と結びついて、日本人の死生観であるとか、鎮守の森に求めるような感覚を、終末期のケアの中にうまく取り入れて融合していけないかという、そういう共同研究を始めつつあります。ホスピスはキリスト教が基盤のものが多いのですが、私は以前から、むしろ「鎮守の森ホスピス」みたいなものがあつたらいいなと思ったりもしましたので、そのようなターミナルケアと結びついた試みです。

ケーススタディ (3) 見沼田んぼ福祉農園

それから三番目は埼玉県の「見沼田んぼ福祉農園」。これは環境あるいは農業と福祉の融合というようなものです。見沼というのは、埼玉県に広がる広大な湿地帯だったのですけれども、ここが昭和30年ごろに台風が来たときに、貯水機能を通じて防災に役立ったということです。そのため農地として保存しようという方針が出されたために、昭和40年代のような風景が、都市の中であるにもかかわらず、わりと残っている場所です。

ここで障害者と家族が見沼で農作業というのを始めたのですが、それが地元の高齢化とかそういう中でだんだん荒廃していったので、ある意味では良かったことかと思いますが、荒廃化を防止するために埼玉県が公有地化事業を行った。その管理の委託を受けるかたちで、「見沼田んぼ福祉農園」を開園した。ここは主に障害者福祉の福祉団体が使っているわけですが、同時に首都圏の大学などの学生が集まって、学生ボランティアが参加するかたちで、「見沼・風の学校」という活動を行っています。これは環境学習的な活動といえますか、ある種の普遍性をもった活動を行っている。まさに環境と福祉の融合といいま

すか、障害者福祉と農業と環境学習あるいは自然環境の保全という要素が、渾然一体となっている活動です。

ケーススタディ（４）法然院

それから最後の例は、比較的よく知られたところで、京都の「法然院」というお寺です。これは一言で言えば、地域に開かれた共同体としてのお寺ということです。梶田さんという住職の方が、お寺が戦後にお葬式仏教といわれるように、非常に閉鎖的なものになってしまったのを、もう少し地域に開かれた、コミュニティの中心としての何らかの役割を果たせないかと、そういう発想で、この「法然院森の教室」とか、「共生」と書いて「ともいき」堂、環境学習拠点というようなものを始めて、さまざまな活動を行っているという例です。

風土・コミュニティ・ケアの融合

以上四つの例を紹介させていただいたのですが、私の話の三番目の柱として、これらのまとめをしたいと思います。

以上の四つの事例から言えることは、文化的歴史的伝統や豊かな自然環境といった、まさに「風土性」と言っているものを活用しながら独自のケアを展開している。先ほども言いましたように、高度成長期においては脇に追いやられていた魅力のある空間がいわば再生している。それから多世代の参加という要素ですね。これはそういうのが強いところと、そうでないところがありますけれども。それからやはり地域に根ざした日常性が重要です。しかしこれは逆説的ですが、現在の日本は日常的な共同体というのも意識的な努力をしなければできないという、いい意味での逆説的な要素、日常性の重要性というものがあると思います。

それから今後の課題として、風土・コミュニティ・ケアの融合を視野に入れた社会資源としての宗教的空間や緑地自然環境の再発見。それから二番目はやはり異分野の交流、人材育成ですね。それから NPO を含む市民活動への支援

のあり方や地域再生への貢献の検討、それから今日のシンポジウムで土地所有の話が何度も出ていますけども、制度面を含めた課題の整理、検討、政策提案ですね、こういった課題が指摘できると思います。

鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク

これらをふまえて、これからこういうのをやっていきたいという段階のものなのですが、それが副題の「鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク」というものです。事実関係としては、私はこれを知ったときは非常に驚いたのですが、全国のお寺の数が8万6000で、神社の数が不思議と今ほぼ同じなのですが8万1000ぐらいあります。以前はもっと多かったと思います。よく日本は非宗教的な民族だといわれることがありますけれども決してそうではなくて、中学校が約1万ですから、中学校区ごとにお寺と神社が8ヶ所ずつあるという、非常に宗教的空間が方々にある。それは非常に貴重な社会資源として考えるべきではないか。スピリチュアリティに通じるケアやコミュニティを醸成する空間として活用できると思います。

コミュニティにおける「死」の要素

また、コミュニティというものは本来「死」という要素を最も本質的な要素として含むもので、そういう死という要素を含んだコミュニティを失ってきたのが戦後の日本社会だったのではないか。つまり農村から都市に大移動する中で、コミュニティの中心にあるスピリチュアリティを含んだものを失ってきた、根なし草のようにになっている状況があるのではないか。

これは補足ですが、日本人の死生観における三つの層とスピリチュアリティということで、一番ベースにあるのが自然のスピリチュアリティ的な層(A)で、おそらくその上に高次宗教、仏教・キリスト教のようなより理念的なもの(B)がある(表1)。現在は唯物論的な、端的に「死=無」という理解が強く、戦後とりわけこういうものが支配的になってきたと思うわけですが、そうした中

表1 死生観の3つの層と「自然のスピリチュアリティ」

	特 質	死の理解・イメージ	生と死の関係
A “原・神道的”（汎神論的な）層	自然のスピリチュアリティ	「常世」「根の国」など …具象性	生と死の連続性／一体性
B “仏教（キリスト教的）な層	現世否定と解脱・救済への志向	浄土、極楽、涅槃など（仏教）、永遠の命（キリスト教） …抽象化／理念化	生と死の二極化
C “唯物論的”な層	「科学的」ないし「近代的」な理解	死＝「無」という理解	生＝「有」 死＝「無」

（出典）筆者作成。

で（A）や（B）の層をどう回復していくかということが課題です。

ケアの二つのベクトル

再び図1について、今日の全体のテーマとも関連づけてみますと、ケアというのは、先ほどは個人から「コミュニティ」「自然」「スピリチュアリティ」のほうに、下の方にいくベクトルだけを言ったわけですが、この図でいうとおそらく上の方に向かう、公共性に向かうベクトルがあるのだらうと。つまり人間あるいは個人という存在が、他とつながるルートとして二つあって、一つは「コミュニティ」「自然」を介して「スピリチュアリティ」の方向につながっていく、いわば個人が「コミュニティ」「自然」「スピリチュアリティ」の方に溶けていくというか、一体化していくようなベクトルがある。

他方で、そうではなくて独立した個人をベースにしながらか公共性の方に向かう、そういうベクトルがあるのではないか。言うまでもなく前者は風土性に向かうローカルなもので、後者は普遍性を志向するものです。このような整理でよいかどうかは私の中でもずっと考えているテーマですが、こういう二つの、ある意味で拮抗するベクトルがあって、しかし両者は両立しうるし、両立させるべきではないかというのがさしあたっての結論となります。